文　献

PH. FR. Von Siebold : Nippon. rchiv Azur Beschreibung von Japan und dessen Neben und Schutzlaendern.
呉秀三著 ： シーボルト先生・その生がい及び功業
呉秀三訳註 ： シーボルトの江戸参府紀行
アレサンデル著 小沢敏夫訳註 ： シーボルトの最終日本紀行
湯浅光明著 ： 科学文化史年表
荒川秀俊著 ： 日本気象学史
中央気象台 海洋気象台 編さん ： 日本気象史料
Thomson's Introduction to Meteorology 1849.
L.F. Kaemtz : Meteorology. 1845.
藤川北魯 ： 長崎と気象学(大正7年9月の長崎日々新聞紙上)　(長崎海洋気象台)

150年前の八月十五夜

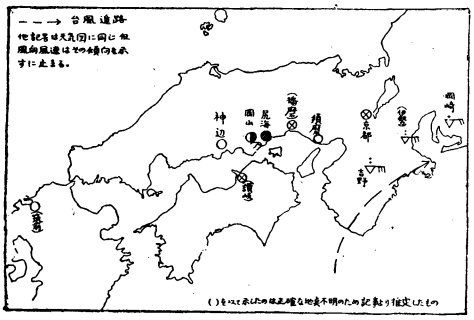
千　葉　徳　爾

既に御承知の方も多いと思うが，文化元年（1804）の中秋名月の夜の天気を西日本各地にわたって調査した菅茶山（1748～1827）の記事は，日本測候史からみて興味多いものである．まだ読まれたことのない方のために，簡単に記載しておきたい．

菅茶山は人も知るように今の広島県神辺町の人で，農家の出ながら京都で儒学を学び帰郷して教育に従った．詩をよくし兼ねて福山藩の地誌である福山志料をあらわし，地理的関心も深かった．その随筆「筆のすさび」の第1巻にこの記事はのせられている．題は「中秋の月」であるために人の注意をひかないが，当時としてはめずらしい科学的な意図を以て記されている点が注意すべきだと思う．

簡単に内容を述べると，中国の詩人蘇東坡の説では中秋の月の日には，世界中どこでも天気が同じであるとのことがいわれていた．ところが対馬に駐在していた京都五山の禪僧の書いたものに，ある年の中秋の月の夜の天気が京都と対馬とちがっていたので不審をおこしたとあるのをみて，茶山もこのことに関心をもったらしい．文化元年の中秋の夜の天気を彼は注意して観察すると共に，各地の友人に当日の天候を問合せたらしい．そのことは文中にはないが，だまっていてはこれほど各地の報告が集まることは考えられないからである．その結果は極めて近距離でありながら，天候は大いにちがうということがはっきり実証された．それと共に茶山は気づかなかったがこの調査によって，当日近畿から中部地方を通過した熱帯低気圧がみごとにとらえられたのである．この実験はこの1回で終ったらしく，東坡の説が正しくないことを実証したに止まったが，もう少し進んで数回調査を重ねたら，天気の推移従って予報の可能性に気づいたのではなかろうかと惜しまれる．

調査された結果を図示すればここに示したとおりであるが，茶山は詩人らしく友人の贈った詩を分析して天候を推定したりしている．たとえば備前尻海の友人の書には「西嶺夕霞魚尾赤，東洋雲気鰲頭黒という句があるから，西は晴れていたが頭上と東方はまだ雲におおわれていたらしいなどという具合である．1ヵ所備前北方の報告というのは，北方が岡山に近い地名だのに岡山から9里と記してあるので疑問があるため採用してない．ここは岡山の天候と相反し，はじめ曇天で後に快晴となったという．



これでみるように兵庫県の須磨までは快晴の地が多いのに，京都では曇天で月はなく，伊勢では風雨で戸をひらき窓をあける人もなかった．大和の吉野ではことに大風であったという話だとある．また愛知県岡崎も雨であったから，熱帯低気圧が紀伊半島に上陸し，伊勢湾を横断しつつあったことが推定できるのである．ことに愛知県の報告でみると山に霧が深くたちこめ，風があって時々通り雨が来たとあるから，台風の進路に当っていた光景がしのばれる．

記事はこれだけであるが，筆者が注意したいのは当時の儒者といえば中国の詩人学者の言を神聖で疑うべからざるものとした時代に，これだけの通信調査を試みてその誤りを証明した科学的精神である．同じころの或る学者は，みみずが鳴くといわれているが実はけらが鳴くのだという説に対して，事実がそうであるとしても，古来みみずが鳴くといわれて来たのだから，今更それをあらためる必要はないなどと論じている．その中にあってこれだけの試みをするという考えかたは容易に出てこないであろう．（東京教育大地理学教室）